

## 第4 持続性の高い農業生産方式の内容

### 1 穀類

#### (1) 水稲

##### ア 水稲（浜通り・中通り平坦）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により地力を維持・向上させ、気象変動に強い稲作を進める。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めると共に、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下** 8.0kg/10a以下***
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 9回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。</li> <li>○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。</li> <li>○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。</li> <li>○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*コシヒカリに準ずる品種等、\*\*ひとめぼれに準ずる品種等、\*\*\*天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ 水稻(会津平坦)

本地域は、灰色低地土が多く、比較的肥沃な土壌が多いが、場所により耕深が浅い等課題のある圃場も見られる。夏季の気象は安定しており、日照時間が比較的多いことから、病虫害の発生が少なく、収量・品質が安定している地域である。しかし、土壌診断に基づいて、完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により、地力を維持し、気象資源を有効に活用した稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は、気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めると共に、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥(側条施肥等)を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下** 8.0kg/10a以下***
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。(カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。)</li> <li>○マルチ栽培を行う。(対象:雑草)</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数(合計) 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。</li> <li>○水田の漏水を防止し除草剤の効率を高める。</li> <li>○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。</li> <li>○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*コシヒカリに準ずる品種等、\*\*ひとめぼれに準ずる品種等、\*\*\*天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

ウ 水稲（山間・山沿い地域）

本地域は灰色低地土、グライ土、多湿黒ボク土などが多く、生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。また、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすい。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等の施用や生わらの腐熟促進により、地力を維持、向上させ、低温に強い稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進させる。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。また、健苗の育成により初期生育を確保すると共に、栄養診断に基づき効率的な追肥を行う。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため、以下の除草技術を実施するとともに水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 1.6kg/10a以下** 8.0kg/10a以下***
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 9回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。</li> <li>○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。</li> <li>○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。</li> <li>○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*ひとめぼれに準ずる品種等、\*\*まいひめに準ずる品種等、\*\*\*里山のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

エ 水稻（湛水直播栽培 浜通り・中通り平坦）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により地力を維持・向上させ、気象変動に強い稲作を進める。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理と適期播種により出芽・苗立ちを促進させると共に、代かき後から播種までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効果的な利用を行い雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効果的な利用により雑草の発生を抑える。</li> <li>○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。</li> <li>○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*コシヒカリに準ずる品種等、\*\*ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

オ 水稲（湛水直播栽培 会津平坦）

本地域は、灰色低地土が多く、比較的肥沃な土壌が多いが、場所により耕深が浅い等課題のある圃場も見られる。夏季の気象は安定しており、日照時間が比較的多いことから、病害虫の発生が少なく、収量・品質が安定している地域である。しかし、土壌診断に基づいて、完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により、地力を維持し、気象資源を有効に活用した稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は、気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理と適期播種により出芽・苗立ちを促進させると共に、代かき後から播種までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効果的な利用を行い雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効果的利用により雑草の発生を抑える。</li> <li>○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。</li> <li>○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*コシヒカリに準ずる品種等、\*\*ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

カ 水稻（湛水直播栽培 山間・山沿い地域）

本地域は灰色低地土、グライ土、多湿黒ボク土などが多く、生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。また、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすい。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等の施用や生わらの腐熟促進により、地力を維持、向上させ、低温に強い稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進させる。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。また、健苗の育成により初期生育を確保すると共に、栄養診断に基づき効率的な追肥を行う。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため、以下の除草技術を実施するとともに水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。また、種子の加温処理と適期播種により出芽・苗立ちを促進させると共に、代かき後から播種までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効果的な利用を行い雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効果的利用により雑草の発生を抑える。</li> <li>○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。</li> <li>○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*ひとめぼれに準ずる品種等、\*\*まいひめに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

キ 水稻（乾田直播栽培 浜通り・中通り平坦）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により地力を維持・向上させ、気象変動に強い稲作を進める。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、土壌の碎土率を上げ出芽・苗立ちを安定させると共に、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下*
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌の碎土率（70%以上）を上げ出芽・苗立ちの促進に努める。</li> <li>○水田の漏水を防止し、施肥窒素の利用率を高める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*については、以下のとおり。

\*ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ク 水稻（乾田直播栽培 会津平坦）

本地域は、灰色低地土が多く、比較的肥沃な土壌が多いが、場所により耕深が浅い等課題のある圃場も見られる。夏季の気象は安定しており、日照時間が比較的多いことから、病虫害の発生が少なく、収量・品質が安定している地域である。しかし、土壌診断に基づいて、完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により、地力を維持し、気象資源を有効に活用した稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は、気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、土壌の碎土率を上げ出芽・苗立ちを安定させると共に、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥（側条施肥等）を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下*
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○除草用動物を利用する。</li> <li>○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。）</li> <li>○マルチ栽培を行う。（対象：雑草）</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌の碎土率（70%以上）を上げ出芽・苗立ちの促進に努める</li> <li>○水田の漏水を防止し、施肥窒素の利用率を高める。</li> <li>○必要に応じて珪酸資材を補給する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*については、以下のとおり。

\*ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。



(2) 麦類

ア 麦類（浜通り・中通り・会津平坦）

本地域の麦類は、主として、水田の転換作物として栽培されている。水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性、化学性や地力の点で課題が多い。

また、麦の播種時期は、秋の長雨により遅れることが多く、湿害が発生しやすく初期生育が遅れやすい。また、登熟期間が梅雨に遭遇するため病害の発生により、品質が低下しやすい。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断に行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用する。

施肥は、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い施肥窒素の利用率を向上させる。

除草では、除草剤の使用を節減するため輪作体系を構築し、マルチ栽培や機械による作付け前の除草、中耕を徹底する。

また、赤かび病は必ず適期防除を行うこと。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> <li>○麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 2 t/10a ※輪作体系の場合は前作に施用したたい肥との合計量とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料等を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以下* 16.0kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械除草を行う（中耕等）。</li> <li>○マルチ栽培を行う。</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。</li> <li>○赤かび病の適期防除を必ず行うこと。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*一般品種、\*\*麺用品種（ゆきちから等）

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ 麦類（会津山間・山沿い）

本地域は、主として、畑作および水田の転換作物として栽培されている。灰色低地土、グライ土、多湿黒ボク土などが多く、積雪量が多いため根雪期間が比較的長いことから、初期生育量さらに越冬後の生育量の確保が困難であり、さらには病害の発生も多く収量が低下しやすい地域である。

また、麦の播種時期は、秋の長雨により遅れることが多く、湿害が発生しやすく初期生育が遅れやすい。さらに、登熟期間が梅雨に遭遇するため病害の発生により、品質が低下しやすい。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断に行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用する。

施肥は、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い施肥窒素の利用率を向上させる。

除草では、除草剤の使用を節減するため輪作体系を構築し、マルチ栽培や機械による作付け前の除草、中耕を徹底する。

また、赤かび病は必ず適期防除を行うこと。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> <li>○麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 2 t/10a ※輪作体系の場合は前作に施用したたい肥との合計量とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料等を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以下* 16.0kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械除草を行う（中耕等）。</li> <li>○マルチ栽培を行う。</li> <li>○温湯種子消毒を行う。</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。</li> <li>○赤かび病の適期防除を必ず行うこと。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の\*、\*\*については、以下のとおり。

\*一般品種、\*\*麵用品種（ゆきちから等）

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(3) 大豆

大豆は、畑作および水田転換作物として栽培されている。本県の水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性、化学性や地力の点で課題が多い。また、大豆の生育時期は、梅雨と重なり、長雨により湿害が発生しやすく生育が遅れやすい。梅雨に遭遇するため、病害の発生や泥の付着により品質が低下しやすい。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用する。

施肥は、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い、窒素の利用率を向上させる。

除草では、除草剤の使用を節減するため輪作体系を構築し、マルチ栽培や機械による作付け前の除草、中耕を徹底する。また、紫斑病等の適期防除に努め、品質の向上を図る。

このため、基本技術を励行すると共に、病虫害発生予察情報を活用し、発生初期の防除に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。(直前施用は避ける。)</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 2 t/10a ※輪作体系の場合は前作に施用したたい肥との合計量とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 6.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械除草を行う(中耕等)。</li> <li>○マルチ栽培(リビングマルチ栽培等)を行う。 (対象:雑草)</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数(合計) 7回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。</li> <li>○紫斑病の適期防除に努めること。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) ソバ

ソバは、畑作および水田転換作物として栽培されている。本県の水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性や化学性の点で課題が多い。そばは、湿害に弱く、収量が不安定である。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用し、地力の維持を図る。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の使用を節減する。

除草では機械による作付け前の除草を徹底する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 0.3t/10a以上
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 1.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○作付け前に機械除草を行う。</li> </ul>	化学農薬使用 回数(合計) 0回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のため排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。</li> </ul>	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(5) 小豆

小豆は、主に中通りや会津地方の中山間地を中心に栽培されており、排水が良好で保水力に富む埴壌土や壤土が適する。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材及び完熟たい肥の施用、又は緑肥を栽培・施用し、地力の維持向上を図る。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の使用を節減する。

除草では機械による作付け前の除草を徹底する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 2.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械除草（中耕等）を行う。</li> <li>○マルチ栽培（リビングマルチ栽培等）を行う。 （対象：雑草）</li> <li>○天然物質由来農薬を利用する。</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のため排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて土壌改良資材やたい肥等の施用量を調整する。</li> </ul>	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(6) エゴマ

エゴマは、主に中通りや会津地方の中山間地を中心に栽培されている。土壌条件による生育の影響は少ないが、湿害や前作の残存窒素量には注意が必要である。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材及び完熟たい肥の施用、又は緑肥を栽培・施用し、地力の維持向上を図る。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の使用量を節減する。

除草では機械による作付け前の除草を徹底する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 0.3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 2.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械除草（中耕等）を行う。</li> <li>○マルチ栽培（リビングマルチ栽培等）を行う。 （対象：雑草）</li> </ul>	化学農薬使用 回数（合計） 0回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のため排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて土壌改良資材やたい肥等の施用量を調整する。</li> </ul>	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(7) ベニバナインゲン (はなまめ) <露地栽培>

ベニバナインゲンマメは排水の良い砂土や粘質土壌によく生育する。県内では高冷地や中山間地の火山灰土壌の畑地帯でも栽培されている。

特に湿地や水の停滞しやすい土地、酸性土壌では生育が不良となるため、深耕や排水性を確保するとともに、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材等を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

また、連作による生育不良が起こりやすいため、他野菜との組み合わせによる輪作を行うようにする。施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過剰を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥法(液肥土壌灌水等)を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 分量 4.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生物農薬を利用する (対象害虫:ハスモンヨトウ等)</li> <li>○マルチ栽培を行う。(対象:雑草)</li> <li>○機械除草を行う。</li> </ul>	化学農薬使用 回数(合計) 3回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施肥量を調整する。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> </ul>	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(8) ナタネ

ナタネは、畑作および水田転換作物として栽培されている。ナタネは環境適応性が極めて高い作物で、耐寒雪性に強く、乾燥に耐える。直根が太く地下深く入るので、黒ボク土など軽しょう土でも麦類のような凍上害を受けにくい。ナタネの耐湿性は麦類より強いが、幼苗期には弱いので排水溝を設置し、排水の良好なほ場を選ぶことが肝要である。また、ナタネの連作地や花崗岩質土壌、黒ボク土などでは、ホウ素欠乏により萎縮や不稔が発生することがあるので、土壌診断を行い、ホウ砂及び石灰等土壌改良資材を施用し、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培施用する。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の節減を図る。

除草は、作付け前の除草を徹底する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施肥技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦桿を直ちにすき込み、土中たい肥とする。	たい肥 1 t / 10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 11.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	○作付け前に機械除草を行う。	化学農薬使用 回数 (合計) 0回
その他の留意事項	○排水溝を設置し、排水の良好なほ場を選ぶ。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用 (経歴) ごとに合計した数である。



(9) ラッカセイ

ラッカセイは、畑作および水田転換作物として栽培されている。本県の水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性、化学性や地力の点で課題が多い。また、生育期間中、長雨等による湿害で生育が遅れ、収量と品質が低下するため、排水の良いほ場を選択するか排水対策を実施し作付する。

施肥は、土壌診断結果に基づいた土壌改良や適正施肥と共に、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い、窒素の利用率を向上させる。さらに、完熟たい肥または緑肥の施肥による土づくりを行う。

雑草防除は、除草剤の使用を節減するため、マルチ栽培や管理機による中耕等を徹底する。また、病害虫防除は、発生初期防除による適期防除に努め、防除回数と収量・品質の向上を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○完熟たい肥を施用する。(直前施用は避ける。)</li> <li>○緑肥作物を栽培・施用する。</li> <li>○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。</li> <li>○麦作付け後の麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。</li> </ul>	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥効調節型肥料を施用する。</li> <li>○有機質肥料を施用する。</li> <li>○局所施肥を行う。</li> </ul>	化学肥料窒素 成分量 4.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械除草を行う(中耕等)。</li> <li>○マルチ栽培を行う(対象:雑草)。</li> </ul>	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。</li> <li>○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。</li> <li>○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。</li> </ul>	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。